

3.11 災害をどのように語り継ぐか

東日本大地震と未曾有の津波、それによって引き起こされた原発災害は3種の事故調査委員会の報告が出揃って、事故の検証が一段落したかに見えます。しかし、次に予想される地震の規模はさらに大きく想定されて、津波予想高さも更に高くなり、原発問題は施設調査ができないため、将来の改善見通しが明らかでないまま、エネルギー事情の観点から再起動が決定されました。我々建設分野にいたものとして、建設の前提から、事故の発生、次への展望をどのように考え、次世代に語り継ぐことができるのでしょうか。現段階で考えられることには自ずから限界はありますが、同時代の建設人としての所感を次世代に語り継いでおくことは必要なことと思います。様々な立場、観点があるかと思いますが、皆さんがそれぞれの職務環境、経験から次世代に伝えるべきこととして、現在、考えておられることをお寄せ頂くこととしました。(編集担当)

過激論に惑わされず冷静な対策を

五十嵐 博一

自然とどう向き合うべきか



東日本大震災では、自然の力の前で人間がいかに無力な存在であるかを思い知らされたように思う。“想定されていた津波”から集落を守るために造られていた堤防は、“想定外の津波”によって、いとも簡単に破壊されてしまった。

所詮、人間は自然の力に抗うことはできない。しかし、自然の力の大きさを知ることができる。そして、時としてその力が脅威となることも理解することはできる。

「これより下に家を建てるな」という先人の教えを守った地区では、家を流されずにすんだという。また、日頃から津波の脅威を教えて避難訓練を続けていた学校では、一人の犠牲者も出すことなく全生徒が無事に避難できたという。自然の脅威を理解し、抗うことなく受け入れたからこそ、被害を最小限に食い止めることができたと言えるのではないかな。

文明の発達の中で、我々は、自分たちが自然の中で生かされているという事実を忘れてはいなかったか。震災を機に、改めて、人間が自然とどう向き合うべきかを考え直す必要があるように思う。

“地震大国”の日本

改めて言うまでもないが、日本は“地震大国”である。マグニチュード6以上の地震は、世界中で10年間に1,000回程度発生しているが、そのうちの約20%は日本で発生している。日本の面積は地球上の陸地面積のわずか0.25%に過ぎないが、この狭い国土で世界中の大地震の2割が発生しているのである。日本に暮らす以上は地震とは無縁ではられない。

想定されていた地震と津波、想定外の被害

政府が毎年とりまとめている防災白書では、かねてより、北海道から東北に至る地域で発生する「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震」が切迫していることを指摘していた。同時に、その地震によって20mを超える津波が発生する危険性も指摘していた。東北で大きな地震が起こること、地震とともに巨大な津波が発生することは、想定されてい

たことなのである。

なお、「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震」が発生した際の被害予測では、死者は約2,700人であったが、このたびの震災による死者・不明者は19,000人を超えており、想定をはるかに上回るものとなった。

厳格な危険予知(KY)活動は難しい

不測の事態が起きたとき、どんな対応がとれるか、どれだけ被害を食い止められるかは、事前の準備にかかっている。建設業や製造業では、事故を未然に防ぐために危険予知(KY)活動を推進している。起り得る危険をあらかじめ洗い出し、事前に対策を講じる。あたり前のことであるが、現実には、これを厳格に実施するのは難しい。

原発でも、巨大な津波に襲われる危険性や全ての電源が喪失する危険性は予測できたはずであるし、予測されていたはずである。しかし、起こる確率が低いと判断して事前の対策を怠っていた。経済性を優先したために、厳格なKY活動がなされていなかったのではないかな。あるいは、自然の脅威を過小評価していたのではないかな。

原発に限らず、一般的な建設業の仕事の中でも似たようなことはあり得るだろう。私自身の過去を振り返ってみても、滅多におこらないであろうこと、すぐには起こらないであろうことへの事前の対策をいつもしっかりやっていたかと問われれば、正直なところ、十分にやっていたとは言い切れない。

地道な努力の積み重ねが大事

建設現場や工場には、「安全第一」のスローガンが掲げられる。当然のことながら、スローガンを掲げるだけでは安全を確保することはできない。「安全第一」の思想が組織の文化として定着していて、厳格なKY活動がなされていなければ、毎日の作業を無事故で進めることはできないし、万が一、事故が起こった際に被害を最小限に食い止めることはできない。

災害対策や事故防止にウルトラCはない。日々の地道な努力の積み重ねが、「安全第一」という組織文化を定着させるのである。起り得る危険を認識し、そこから目をそらすことなく真摯に対策を講ずることこそが災害対策や事故防止の王道である。(次ページにつづく)